

I S O国際会議に出席して——ベルリンの印象——

I S O会議

4月19日、成田発14分05分、ルフトハンザ航空711便フランクフルト経由ベルリン行きの機中で、出発前の慌ただしさを思いおこし、出かける度に毎回同じパターンが繰り返されていることが不思議であった。

ベルリンでの車いす規格に関する国際会議に出席するのが目的であり、翌日から早速4日間の会議がD I N(ドイツ規格協会)で始まった。

この規格制定作業は長い間時間をかけて行われており、あと2年間程度で主要な部分の作業は終了するという方向で動いている。しかし、さらに新しい規格化も提案され、新たに作業グループも作られた。

それにつけても開催ホスト国は良くやってくれている。ドイツは今回で3回目の開催であり、ヨーロッパのまとめ役として頑張っていると感じられた。来春の作業部会の会議を日本での意向もあり、今後、各グループの責任者間で調整がとられると思われるが正式な話が入れば、日本としても受け入れ準備を進める必要がある。

ドイツ料理

さて、会議の話はこれぐらいにして、ベルリンで感じたいいくつかを述べてみたい。この時期は暗くなるのが9時近くになってからであり、レストランでの夕食は8時ぐらいからスタートするのが一般的なようである。我々のように仕事が済むとすぐ夕食をとろうと思うと、まだ、レストランがオープンしていないことになる。開店するのを待ち構えて入るおかげで予約なしでも一流レストランに入ることができた。ビールの本場だけのことはあり、自家製のものも作られている。ビール党にとってはこの上なく嬉しいところである。また、ドイツワインは私の好みにぴったりで、おいしく飲むことができた。しかし、料理は日本料理のような繊細さがなく、味も塩分がきいたものが多かったように思う。

自転車

全く気がつかずに市内を歩いていたら、後から猛スピードで自転車が走って来て慌てて避けた。良く見ると、歩道の中に色分けされた自転車道があり、当然ながら自転車が優先で、その部分を歩いてぶつけられても文句が言えないとのことであった。交通信号は変わるのが非常に早く、また横断歩道の途中で変わってしまう。何と忙しいところであろうか。

ウィークデーの町中ではさほど自転車は見かけなかったが、休日の公園にはたくさんの人々が自転車を乗り回

していた。そして、博物館では多くの古い自転車が飛行機や汽車と共に展示されていた。

労働

ドイツでは労働時間は法律で定められ、店等ではきちんと時間が守られているようである。日本のように働き過ぎることのないよう、ゆとりをもって生活しているのではないかと思える。休日には、のみの市と称するガラクタ市が町のどこかにたつ。人々はこれをのんびり見ながら歩く。まるでお祭り気分のような気がしたが、本当にガラクタばかりで私の興味を引く掘り出し物は探すことができなかった。

壁のその後

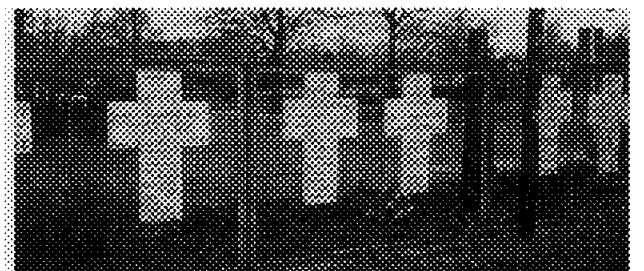
1989年11月、東西ベルリンを分断していた壁はなくなった。部分的にその名残りをとどめる程度でほとんどわからない。ただ、今なお、旧東側の住宅事情は悪いらしく、水道やガスが故障してもなかなか修理してもらえないとのことであった。旧西側から列車に乗って旧東側へも移動してみたが、駅などは今なお暗く、倉庫のような印象を受けた。壁があったブランデンブルグ門へ出かけてみたが壁を乗り越えようとして射殺された多くの人達の名前が書かれた墓標が立てられており、訪れた人々が手を合わせていた。

近くの通りでは旧ソビエト連邦からの品物が露店で売られていた。以前はこのような光景は見られなかったと考えられるが、軍の放出品と見られる衣類や望遠鏡、カメラ、こけし等が所せましと並べられていた。

人々の印象

よそ者がほんのちょっとしたぞいたベルリンは、その後訪れたミュンヘンやイタリア等と比べて暗いイメージで陽気さはあまり感じられなかった。しかし、頑固なまでも自国に誇りを持ち、技術を継承し古いものを大切にしている人々に触れ、日本人として自分の考え、生き方をもう一度見直してみる必要もあるのではないかの印象を与えてくれたベルリンであった。

(品質構造研究部主任研究員 高橋義信)



壁を越えようとして殺された人々の墓標